

文化 CULTURE

「ただ憧れを知るもののみ。オーストリアに抱く深いわが思いはまさにこれ。オーストリアというよりウィーンの魅力にとり憑かれたというべきだろう。街角に佇んでいるだけで心は種やか、気持ちばかりか身体の動きや言葉遣いまでゆったりするのは一体どうしてだろう。こんな街はほかにはない。喧騒でせわししいだけの東京などへ行く気はないが、ウィーンだけは何度出かけても善いなない。まさしくウィーン病、それもかなりの重症だ。」

初めてこの街を訪れたのは一九六八年。三夜連続のオペラは「トスカ」「セウリアの理髮師」「蝶々夫人」。ビルギット・ニルソンのトスカには二十五年経った今も感動しつづける。この時は三月方近い独り旅の途中で一週間ほどの滞在だったが、それでも国立歌劇場や楽友協会ホールの楽屋裏などを精神的に見てまわった。仕事がらみで毎年のようにウィーン通いが始ま

ウィーンがあなたを待っている

岡田 寛

かがわ音楽季

トと志度町(現さぬき市)との姉妹縁組話が持ち上がったのが九一年。にわかに訪壇チャンスが増えた。

幸せな時間ゆったりと

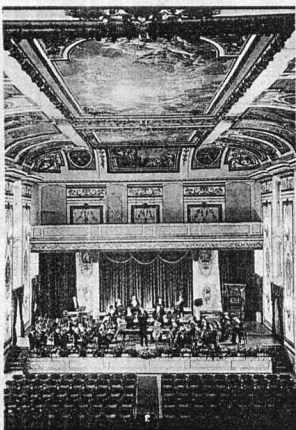
トしたのは九七年。以来アイゼンスタット市が公式レセプションを開いて歓迎するのは、さぬき市以外には日本からこの協会だけ。会長の三宅洋三は医師。四十年前に国際外科医学会で渡壇して以来抱き続けたウィーンへの憧れが爆発したかのように連続五年、親善団長として夫妻で訪壇している。副会長で三越高松店長の吉田莞爾もバリ店務が長く、毎月訪ねたウィーンの思い出は尽きない。会員は、理事でNTTドコ

モ四国社長、クラシック通の中澤正良の招きで一流トコモコンサートに参加できるのが嬉しい。協会事務局のある三越の六階食堂を時折開くCDトクコンサートも好評。監事で無類の歌劇通弁護士、木村三が語るオペラへの熱い思いが会員の胸に沁みわたる。

世界に漫るうちに、実に優雅で楽しい気分になるから不思議なものだ。会合では定刻前に出席予定者が殆ど揃うのもこの協会ならではの。いわゆる高松時間とは無縁。会員の推薦紹介だけが条件で集まった二百人の高い知性と品格がにじみ出る。これもすべてウィーンの魅力がなせるわざなのだ



三宅洋三さん



毎年9月に行われる国際ハイドン音楽祭の主会場となるアイゼンスタット市エステルハーツィ宮殿内の「ハイドンザール」。ホール響きと天井のフレスコ画が美しい

ろつ。毎年五月の定時総会には素敵なゲストを迎える。今年にはウィーン大学東アジア研究所日本学科学講師のドメニク・ローランドを招いた。ウィーン工科大学で学んだ理事、西谷賢二の親友だ。大抵の日本人以上に上品で正確な日本語を話す三十七歳、生粋のウィーン子が語る日奥文化論に魂を洗われる思いがした。

日本からは僅か二時間のウィーン。昼間は美術館めぐりでリネージュルやクリムト、夜は最高のオペラにコンサート。何と幸せな時間がゆったりと過ぎていくことが。十八世紀へのタイムスリップにも似た恍惚感には、まさに芸術文化が人間生活に欠かせないことをはつきり物語っている。

すべでは超一流ホモの別世界。いま、ウィーンがあなたを待っている。(高松市在住、音楽評論家・文中敬称略)

※毎月第3月曜日に掲載します。